

## サ行(サ・シ・ス)の二音節動詞はこれがすべて

	意味	ス	サ	シ
吸う	[収縮] 窄む・縮む 圧縮する 萎れ機能を失う	スフ(吸)	サフ(遮)	シス(殺) シヌ(死) シフ(廢) シフ(強) シム(染)
	[集結] 寄り集まる 場所を占める	スフ(統) スム(住) スウ(据)	サツ サル	シク(占) シク(敷) シル(占)
	[密集] 密度頻度が高い 賑わう		サク(栄) サク(咲)	シク(頻)
進む	[進行]	ス(為) スク(次) スグ(過)	サス(指) サブ(進) サク(放) サル(去) サル(曝)	シク(及) シム(進) シル(知)
	[下降]	スツ(棄)	サブ(寂)	シズ(垂)
オノマトペ	隙間を通すスーッと動く	スク(漉) スク(掬) スム(澄) スル(摩)	サク(裂)	

『時代別』の見出し語のうち上記に掲載していない語は、【 】内の語の特別な場合とみなしている。

【サク(裂)】サク(波が砕ける) サク(アカギレで手が割れる) サク(裂、裂くの下二段) 【サク(放・疎)】サク(疎、サカルの下二段) サク(離、離れるの下二段) 【サス(刺・指)】サス(指、光が射す) サス(閉、門を指す。または締める意か) 【シム(染)】シム(染の下二段)

## カ行語彙

カ行はなかなか複雑な行です。カ行以外の行では、その行を作る基本動詞は1～3個程度ですが、カ行だけは4個くらいあるようなのです。比較的分かりやすいものから取り上げていきます。

## (1) 下る

クダル(下る)・クル(暮る)は、それぞれ次のような語を作ります。

クダル(下る)の関連語には次のような語があります。

(下降) <sup>クダ</sup>下る <sup>クダ</sup>降つ <sup>クダ</sup>屈む <sup>クボ</sup>窪む <sup>クジ</sup>抉る  
(崩落) <sup>クダ</sup>砕く <sup>クジ</sup>挫く <sup>ク</sup>崩ゆ <sup>ク</sup>崩る  
(腐敗) <sup>ク</sup>朽つ <sup>クサ</sup>腐る <sup>クサ</sup>臭し <sup>クツ</sup>屑

これらの語は、「ク～」という語形のままで、カキケコという音韻変化はしていないようです。

クル(暮る)の方は次のような変化があります。

ク 暗し 黒 くすむ 燻ぶ  
カ かすむ かすか (←くすむ)  
コ 焦ぐ 濃し

## (2) くるむ

「くるむ」というのは、くるくる回すのクルに基づく語でしょう。

この意味の「ク」は、次のような語を作っています。

カ 囲む 垣 隠る  
キ [甲] 着る [乙] 城 棺(ひつぎ)  
コ [甲] 籠(コ) [乙] 衣

キ(城)は、奥津城の意で「周りに垣を構えめぐらして、内と外を区切った場所」であり、要するに「囲んだ場所」です。

ヒツギは、ヒ(秘す、覆ったもの)ツ(助詞)ギ(くるむ)と解されるのでした。籠も「くるむ入れ物」の意です。

なお、「着る」も「衣」も「くるむ」意と考えられますが、「着」が甲類なのは、日常のものだけに kui の一音化が早く進んだのでしょ

## 『大和言葉の作り方』(p81) 「K」の基本義の2

う。籠が甲類なものも同様です。

食器のことを「ケ(筥)」というのは、「窪んだモノ」と解するのがよいでしょうが、「(食物を)クルムモノ」とも解されます。

### (3) 繰る

「刈る」「切る」に類する意味を持つ語が、カ・キ・コの各音にあります。

カ 刈る 掻く

キ 切る

コ 扱(く)く(しごき落とす) 伐る 漕ぐ

これらの語は、「手繰る」のクルのように、手前に引く動作を表すク・クルから派生したと考えられます。

### (4) 来る

「木」が、kui に遡ることは既に説明した通りですが、元になった「ク」は何でしょうか。「来」であって「生えてきたもの」の意ではないでしょうか。「木」というものを指示するのにどういう表現がありうるのか、「幹が太くて緑の枝葉を持つ物」というような長い情報が「ク」一語の中に含まれているはずはありません。丸太といいますからコロコロした物だということは考えられます。しかしクサ(草)のクであり、ケ(毛)も本来 kui でクに基づく語ですから、「生えて来たもの=来」と解する妥当性があるように思います。

また、「カ」は「上方・上部」の意味にもなります。

カミ(上) カカグ(掲ぐ) カサ(笠) カシラ(頭)

また

カド(角) カタ(片)

のように、「先端、端」を表す語にもなります。

キも「先端、端」の意の語を作ります。

キザス(兆す) キシ(岸) キハ(際) キミ(君)

「君」は「キ(先頭に立つ、第一の)ミ(身=人、または御)」であり、おそらく「后」も「キ(第一の)サキ(先、一音語に同意の二音語を重

## 『大和言葉の作り方』(p81) 「K」の基本義の3

ねる用法)」と考えられます。

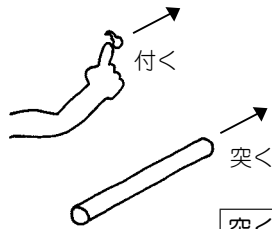
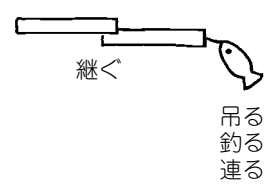
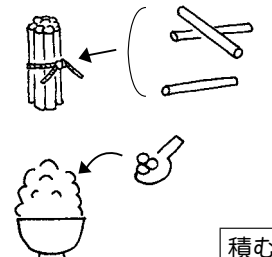
### 問題点

他の行が一つか二つくらいの元になる一音語しかないのに、力行では四つの意味を抽出しました。コロコロとかクルクルと言いますから、クルム・クル(繰)の意の語ができるのは理解できます。しかし、クダル(下)やク(来)の語を作る一方で反対の意味のカミ(上)やカル(離)も作るということになると「いったいどうなっているんだ!」と思います。しかし、力行だけが特別というはずもなく、他の行と同様の原則によって解されるべきです。

本書の16ページで、カクス(隠)・カコフ(囲)・カギル(限)・カキ(垣)の元になるカク(囲う・くるむ意)なる語を想定しました。また、カス(重)という語もあるわけですが、カスもカコフ意で繋がる可能性があります。力行は多くの意味があるように見えますが、切り分けの仕方でもう少し整理できるかもしれません。

なお、力行の古代音は、琉球方言の一部で大和言葉の力行音がハ行音になっていること、奄美方言では口蓋垂音(X音)であること、『書紀』が力行音の一部を喉音で表記していることなどからして、現代力行音よりも喉音に近い特性を持っていたものと推測されます。

「ツ～」の2音節動詞はすべて「付着」の意味を持つ

	四段動詞 (9語)	二段動詞 (6語)
付着 	ツク(著・附・託) ツム(採)	ツク(著・附・託) ツク(漬)
突く	ツク(搗) ツク(突)	ツク(尽)
連続 	ツグ(継・次) ツル(釣)	ツグ(継・次) ツツ(伝)
集積 	ツク(給) ツム(積)	ツム(集・蔵)
積む	ツク(築)	

「ト～」の動詞・名詞はツ起源である

## 動詞

	分類	2音節動詞	3音節動詞
膠着	ツ(付) ツ(点)	トム(富) トル(取) トク(解) トグ(磨)	トラフ(取)(捕) トガム←止グ
名詞+語尾	ト(処) ト(戸)	トク(着) トグ(遂) トム(止) トフ(訪) トフ(婚) トツ(閉)…戸ツ	トマル(止) トモス(点)←点ム トホス・トホル(通) トツグ(嫁)←処+ツグ トナム(巡)←ト+ナム
*		トブ(飛)	トナフ(呪) トコフ(呪) トヨム(響)トバス(飛)

(\*は擬音もしくは問題があるもの)

## 名詞

分類	1音節名詞	2音節名詞
処	ト(処)	トキ(時) トシ(年) トジ(刀自) トノ(殿)
止まる	ト(砥) ト(常)	トコ(床) トコ(常) トガ(咎) トモ(艫) トモ(輛)
戸	ト(戸) ト(外)	
その他	ト(十)	